

取材レポート アメリカ西海岸

帝国書院取材班

2008年9月。カリフォルニア州を中心に、アメリカ西海岸地域の今の様子を取材する機会を得た。サンフランシスコからメキシコ国境までを車で南下するルートも辿ったが、誌面の都合上すべてを紹介することはできないので、印象に残ったところを簡単に紹介したい。

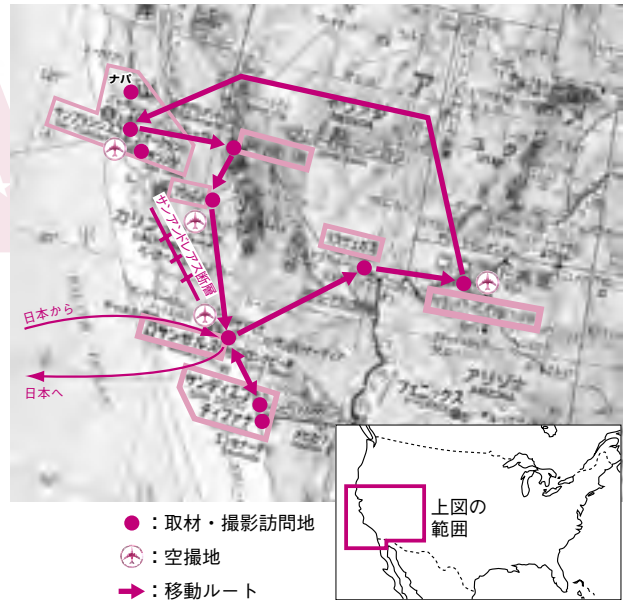


☆断層を求めて

今回の取材では4度の空撮を行ったが、一番印象深いのはサンアンドレアス断層（本冊子表紙）の空撮である。この断層は、カリフォルニア州を南北に貫く、全長1000km以上にもおよぶ巨大な横ずれ断層である。横ずれ断層の横綱ともいべきメジャーな断層で、この断層を写真に収めるのが今回の取材の大きな目標の一つであった。「簡単に見つかるだろう」と最初は高を括っていたのだが、ごつごつしたはげ山と荒涼とした岩石砂漠の似たような景色が延々と続き、なかなか断層を発見することができず非常に焦った。最終的にはカリフォルニア州の道路地図を頼りにおおよその緯度・経度を割り出し、その周辺をくまなく飛んでもらい、ようやく発見できた（発見できた時は心底ホッとした）。表紙の写真は、ベーカーズフィールドの南西約60km、カリゾ平原上空から撮影したもので、砂漠の中に巨大な恐竜の骨格が出現したかのような光景に圧倒される。

☆農業大州 カリフォルニア

カリフォルニアといえば、シリコンヴァレーを中心としたIT関連産業の印象が強いが、綿花や果樹、米の栽培など、農業が非常に盛んな地域でもある。今取材では、カリフォルニア州中部に位置するフレズノの農園を訪ねた。フレズノは果樹栽培が盛んな地域であり、どの農園も大規模で、さまざまな種類の果樹を栽培している。取材先の農園も350ha、1600haとかなりの規模であった。ちょうどナシやブドウ、ネクタリン（桃の一種）の収穫シーズンであり、多くの外国人労働者が収穫作業にあっていた（右ページ写真上）。彼らの多くはメキシコからやってきたヒスパニック系の人々であり、各地の農園を転々としながら収穫作業を請け負っているようだ。取材先の日系人農園主もごく自然にスペイン語を操り、外国人労働者たちとコミュニケーションをとっていた姿が印象的であった。



☆アメリカとメキシコの国境の街で思うこと

取材の最後に、サンディエゴからメキシコのティファナに入国した。72時間以内の滞在であれば、ビザ不要で入国審査もなく、簡単に入国できる。国境を越えると、家のつくりや、人々の身なりから、やはりそこは豊かな国「アメリカ」とは違う国だと感じさせる。右ページ写真下は、国境地帯のものである。国境線のまぢかである。小高い丘の上まで住宅がひしめいているのがメキシコのティファナ、その向こうの植生もほとんどなく、家もなく、裸地の丘が見えるのがアメリカである。ツインシティーの場合とは違って、アメリカはここでは乾燥した国境地帯にまで進出する必要はないと考えたのだろうか。人為的な境界線一本で、ここまで変わってしまうのかと感じさせられる光景であった。

初めて踏むアメリカ西海岸の地。太陽が燦燦と降り注ぎ、肌の色や、生まれの違うさまざまな人々が違和感なく行きかい、自由な雰囲気につつまれていた。人々の耳目を集めるものにあふれ、『何でもアリフォルニア カリフォルニア』という日本での観光キャッチコピーは、決してハッターリではないなと感じさせられた旅であった。

※今取材で撮影した写真は、『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2009』（p.126）にも掲載されていますので、是非ご覧ください。また、詳しい行程や、他の取材地などについては、帝国書院のホームページにて後日ご紹介します。



